

2023 年度ティーチングポートフォリオ (文学部)

<目 次>

1. 安藤 弥	p 1
2. 市野 智行	p 2
3. 金山 泰志	p 5
4. 古川 桂	p 7
5. 園田 博文	p 9
6. 鶴見 晃	p 11
7. 手嶋 大侑	p 15
8. 福田 琢	p 17
9. 三川 智央	p 19
10. 箕浦 尚美	p 22
11. 山崎 健太	p 24
12. 山脇 雅夫	p 27
13. 渡邊 幸彦	p 29

1、教育の理念

本学は浄土真宗・仏教の精神に基づく大学であり、建学の理念である「同朋和敬」を教育理念とする。お互いを「師弟」ではなく、ともに学び合う学友とし、異なるお互いを敬い、真に和していく関係を「同朋」と呼び、大切にす。また、私達は歴史的存在である。歴史は過去では無く、積み重なって現在を成り立たせているものである。未来に向かい、よりよく歩むために、健やかな歴史的視座を豊かに養う教育を重視している。

2、担当授業の概要

- ・宗教と人間（親鸞と現代） 45名
- ・基礎演習Ⅰ 7名
- ・真宗史Ⅰ 26名
- ・仏教史（日本） 57名
- ・日本史特講 15名
- ・人文学演習ⅠⅡⅢⅣ 22名
- ・仏教文化演習ⅠⅡⅢⅣ 6名
- ・名古屋・中村学（歴史文化） 22名
- ・真宗史〔別科〕 22名
- ・教化学演習B〔別科〕 11名
- ・仏教人間学研究Ⅰ〔大学院〕 11名
- ・日本文化史研究〔大学院〕 2名

3、教育の方法

- ・根本的には、「勉強」ではなく「学問・研究」に取り組むこと、仏教「を」学ぶのではなく、仏教「に」（自らを）学ぶことを基礎としている。
- ・その上で、基礎知識の習得のために講義形式を実施し、実践経験の蓄積のために演習形式を実施する。フィールドワークも重視して実践している。
- ・健やかに生きる力としての仏教、問題の本質を見極める力としての歴史的視座を身につけてもらうため、自らの人生と社会的な現場を常に実感する学びの場を形成する。

4、学生からの評価と授業改善への努力

- ・授業評価アンケートの数値は平均値以上を確保している。「よい声量で聞こえやすい」「前回の授業のリマインドがあり、当日の授業の位置付けが話され、また難しい言葉には説明があり、授業の内容がわかりやすい」というコメントは意識的な取り組みと合致する。
- ・改善点として指摘されやすいのは「板書」に関する問題であり、これは適切な文字の大きさと量で示すことを心がけて実践していくことで対処可能な課題点と認識している。

5、今後の教育目標

- ・教育はただ「わかりやすい」でよいものではない。高度な専門性を常に磨きつつ、それを適切な感覚で学生に還元し、ともに成長していくことを心がけていきたい。

1 教育の理念

本学の建学の理念である「同朋和教」に基づき、学部学科を越えて、更には教職員も含め「共に生き、共に学ぶ」ことのできる教育指導体制の構築が重要である。その体制を担う一人として、教育、研究に取り組んでいきたい。なぜ、同朋大学で仏教を、文学を、社会福祉を学ぶのか。大学生活の基本的な立脚地として、一人ひとりが「なぜ学ぶのか」ということに向き合えるような場所を少しでも多く提供していきたい。私は全学生必須科目の「宗教と人間」を多く担当している。人間学の必要性を建学の理念を通して学ぶことの意味を、学生と共有したいと考えている。

2 担当授業の概要

- ・基礎演習Ⅲ 13名
- ・基礎演習Ⅳ 12名
- ・教化学特講Ⅰ 8名
- ・教化学特講Ⅱ 20名
- ・七祖教義Ⅱ 16名
- ・死生学 54名
- ・浄土三部経講読演習Ⅱ 12名
- ・現代教養概論Ⅰ 77名
- ・親鸞と現代B（文学部） 37名
- ・親鸞と現代C（社会福祉） 63名
- ・親鸞と現代F（編入・再履） 29名
- ・釈尊と現代D 65名
- ・教化学講義（別科） 23名
- ・真宗学演習B（別科） 11名
- ・論文指導 名
- ・教化学実習Ⅰ（大谷派教師課程） 7名
- ・教化学実習Ⅱ（大谷派教師課程） 4名
- ・教化学実習（別科） 23名
- ・仏教学（音大） 38名
- ・海外文化研修 15名

3 教育の方法

仏教学科の半数は寺院出身者（別科はほぼ全員）で、将来僧侶あるいは住職なることを志

している。具体的には大谷派教師資格の取得を目指すことになるが、その授業内容は大きく講義、講読、演習、実習に大別できる。講義科目は、仏教学、真宗学の基本的な知識習得のため、学びの土台となる基礎的な学びを主要とする。講読科目は、文献を読むことと、文献へのアプローチを学ぶため、発表と講義を交互に行い理解を深める。演習科目は、発表資料の作成から論文指導まで、主体的な学びを基軸に置く。特に仏教から各自が何を学んだのか、という方向性の学びを大切するため、現代社会における様々な問題を取り上げていく。実習科目は、より実践的な法話実習や法語作成など、卒業後をイメージした学びを展開している。加えて、臨床仏教、グリーンケアの学びも今年度の課題点を抽出し、より充実したものとしていく。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートは少人数クラスでは実施していないため、全ての授業に関する評価とは言えないが、市野担当授業への2023年度の評価を踏まえ、次年度への見通しについて記したい。まず実際のアンケートに記されていた学生の声を列挙すると次の通りである。

【良かった点】

- ・授業の進行速度が良かった
- ・授業資料に穴埋めなどあり、集中して取り組むことが出来た
- ・分かりやすかった（聞き取りやすかった）
- ・スマホを触らないことを徹底してくれたのは良かった

【改善すべき点】

- ・スクリーンの難解な漢字にルビ等をふって欲しい
- ・授業中のトイレ等に関する注意をガイダンス時に徹底してほしい

【良かった点】については継続していき【改善すべき点】については以下のように取り組んでいきたい。

- ・各授業のガイダンスにおいて、受講に関する約束事を時間をかけて丁寧に説明する。
- ・スクリーンを使用した授業は、より工夫を凝らし分かりやすさを追求していく。
- ・演習授業は資料作成方法など、授業導入により注力したい。文献を読み、理解し、他者を意識しながら資料を作成することは、卒業論文に向けても大切な準備の一つとなる。加えて、文献に対する引用マナーなども具体例を出し、丁寧に指導する必要があると感じている。
- ・ワークショップの意義と回収作業を丁寧にしていく必要性を感じている。ただ、やるだけでなく、なることを意味とやったことの成果を振り返ることで、より積極的な学びへとつなげていくことができると考えられる。また、全体共有の時間も必要であると感じている。

5 今後の教育目標

講義、講読、演習、実習の四領域を意識し、机上のみの学びにならないよう、学生が主体的に学ぶことができるような方法を取り入れていきたい。

特に、4年間の集大成である卒業論文の作成については、テーマ設定から論文の書き方に至るまで、よりきめ細やかな指導が必要であると考えている。

2023年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 金山 泰志

1、教育の理念

同朋大学文学部人文学科の教育理念は、「建学の理念である「同朋和敬」の精神に基づき、社会的な価値観に埋没しがちな個性の存在価値を大切にします。文学・歴史・思想・文化の各分野におけるアカデミックな教育を基盤に、人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことが本学科の教育目的です」（『学生生活 2020』3-11）とある。

金山は主に「歴史」分野を担当するものであり、「歴史学」主に日本史の領野から、教養的な「歴史知識」の教授に加え（授業としては講義系）、日本史の卒業論文の作成を通じ（授業としては演習系）、卒業後の社会で最も重要となる「思考力」を養うことを意識し、授業を行っている。また、「学生の卒業後に必要な能力とは何か」について深く考えた。

2、担当授業の概要

基礎演習Ⅱ

基礎演習Ⅲ

基礎演習Ⅳ

人文学演習Ⅰ

人文学演習Ⅱ

人文学演習Ⅲ

人文学演習Ⅳ

人文学講読演習Ⅰ

人文学講読演習Ⅱ

日本文化史（思想史）

現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式）

日本史概説

日本史特講Ⅲ

サブカルチャー論

地域文化論

名古屋・中村学講義（歴史文化）

卒業論文

卒業論文指導

3、教育の方法

文学部人文学科の教育理念にあった「教養力」を培うための授業としては、上記の授業の中では「日本史概説」「日本史特講」「歴史文化概論」「日本文化史（思想史）」「サブカルチャー論」「地域文化論」などが該当する。これらの授業は主に講義を主軸とした教授を行っており、日本史などの専門的知識ばかりを詰め込む授業とはせず、歴史と文化にまで視野を広げ、学生が卒業後に社会で生きていくうえで有用な知識を獲得してもらうことを意識している。そのため、既存の教科書などは使用せず、自身で作成した授業プリントを土台に、最新の歴史学知見を踏まえた授業内容となるように努力している。

もう一つの「思考力」を培うための授業としては、上記の授業の中では「基礎演習」「人文学演習」「人文学講読演習」などが該当する。この「思考力」を培う授業は、文学部人文学科の学びにおいても最も重要であると考え。ここでいう思考力とは、大学で自らが研究することによって得られる「専門的な思考力」のことを指す。自分で研究テーマを見つけ、その答えをその専門領野の研究手法をもとに、自ら考え導き出していく。その総まとめが「卒業論文」である。その研究活動の過程で、その専門領野ならではの「思考力」が自然と身についていく。歴史学であれば「歴史的思考力」であり、文学であれば「文学的思考力」となる。その思考力は本を読んだり、授業を漫然と受けているだけで、簡単に見につくものではない。大学生生活四年間を費やして、研究を実際に行ってみることで、身についていく力である。演習の授業では、研究の技法を教え、専門的な論文を書き上げることを目標に、史料の講読や研究の進め方を指導している。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2021年度に実施された授業評価アンケートでは、授業の目的・内容、学生の授業への参加状況、教員の授業方法や態度、環境、学習の達成度、授業への満足度などが、概ね平均値を上回っていた。

改善点としては、大人数授業での学生対応があげられる。特に授業内試験では大きな課題（学生による不正行為）が見つかった。そもそも不正行為ができない環境を作ることが重要である。

5、今後の教育目標

2024年4月1日より、他大学に移るため、省略する。

(以上)

1、教育の理念

本学の見学の理念である「同朋和敬」の精神に基づき、文学部人文学科は人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究することを教育目標としている。私が担当する歴史学（西洋史）は異なる時空間に存在した他者に眼差しを向け、彼らを認識し理解することの試みでもある。この積み重ねは、人間とはなにかという真理の探究であるとともに、他者の生み出したもの＝異文化を理解する思考力を育むことでもある。西洋史を学ぶ中で、異文化への認識や理解を深め、混迷する現代を共に生きるための力を育みたいと考えている。そのためにも他者への眼差し以上に、自己を見つめ、自らの視点や思考を認識することができるよう努めたい。

2、担当授業の概要

【専門科目】

世界遺産学 基礎演習Ⅰ・Ⅳ 人文学講読演習Ⅰ・Ⅱ 歴史文化概論Ⅰ 現代教養概論Ⅰ 文化交流史 文化総合 人文学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 卒業論文 卒業論文指導

【共通教養科目】

外国史（西洋）

【学芸員課程科目】

博物館概論 博物館情報論 博物館教育論 博物館実習Ⅰ 博物館実習Ⅱ

3、教育の方法

西洋史の基礎的な知識がない学生に対し、まずは関心を持ってもらうことが必要と考えており、身近なものや知名度の高い人物や事項から西洋の歴史を学んでもらえるように心がけている。大人数の講義では、学生に対して質問をする際に、事前に提出させた出席カードを無作為に選び、該当する学生に答えさせた。また講義科目では授業の終わりにコメントペーパーに考察したことや質問を記入させている。次の授業の冒頭で紹介したり、質問に回答したりすることで、他者の意見や視点を学び、理解を深めてもらえるよう努めている。

学芸員課程の担当する講義全てにおいて、前半の講義で学んだ内容が実際どのように実現されているかを自らの目で確かめるため、博物館を訪問して各分野について分析・考察し、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行う。これにより博物館の資料を鑑賞する立場から博物館を作り、運営していく立場の視点を養うことを促している。これらの授業を通して、さまざまな視点から博物館の活動を自ら体験し、分析するとともに、パワーポイントを用いた発表やディスカッションを繰り返すことで、プレゼン力、意見交換をするコミュ

コミュニケーション力も養われる。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2023年度に行われた授業評価アンケートでは、概ね平均値を上回った。「難しいがわかりやすく説明してくれる」、「この大学に行っていないと学べないものだと感じた」、「学べば学ぶほど興味深い」などのコメントがある一方で、「難しすぎて何をしているのかわからない」と言った声も寄せられた。資料プリントなどを事前に配布して、事前学習を促していくことで授業内での理解を深められるようにしたい。

評価が他の項目よりも低かったものは、大人数講義におけるコミュニケーションの取り方であった。昨年はコメントペーパーを用いたのみであったが、今年度は前記したとおり学生に質問を行った。

昨年までと比べ、アンケートの回答率、自由記述が減少しており、授業への関心が薄れていると感じる。またテキストを用いた授業においては、事前学習としてテキストの該当部分を読み、疑問点などを調べてくるよう指示しているが、ほとんど行われておらず、授業内容を理解できない学生も多い。次年度は事前にテキストを読んで課題をさせるなどの工夫をしたい。

5、今後の教育目標

他者を理解するためにはまず自分を認識することが必要である。そのためにはまず自分が持つ視点に気づき、自己を客観的に捉えられるような機会を歴史学の授業に取り入れたいと考えている。自らを客観的にみることは、学問において客観的に捉えることの大切さを学ぶ機会にもなる。

2023 年度ティーチングポートフォリオ

文学部 教授 園田 博文

1、教育の理念

「同朋和敬」の精神を建学の理念としており、「共に学ぶ」「共に育つ」教育を実践していく。園田の担当する授業は、国語学関連の科目である。国語学の授業を通して、文化への貢献、広く豊かな教養の獲得、真理の探究を目指している。さらに、母語としての日本語、第二言語（外国語）としての日本語、自文化としての日本文化、異文化としての日本文化に気づけるように配慮している。

2、担当授業の概要

国語学概論Ⅰ 55名（大人数授業）
国語学概論Ⅱ 48名
国語法 33名
国語史 21名
日本語文体論 62名（大人数授業）
人文学講読演習Ⅰ 4－4 25名
人文学講読演習Ⅱ 4－4 27名
人文学講読演習Ⅰ 1 4－2 8名
基礎演習Ⅲ C 23名
基礎演習Ⅳ B 8名
人文学演習Ⅰ D 8名
人文学演習Ⅱ D 8名
人文学演習Ⅲ D 8名
人文学演習Ⅳ D 8名
現代教養概論Ⅱ 92名（オムニバス 2回）
典籍文化研究（院） 2名
卒業論文 7名
論文指導 7名

3、教育の方法

基礎演習Ⅳおよび人文学演習Ⅰ～Ⅳは、所謂ゼミである。1コマ90分の授業で2～3名の学生が発表し、発表に当たっていない学生は、質問や意見、感想を述べ、全員でディスカッションを行った。ゼミでは主体的な学びを重視しているため、発表する内容は、基本的に学生が自分で決める。決める際には適宜助言を行っている。ゼミで何回か発表し、教員や他の学生の意見も参考にしながら、論文指導を受け、卒業論文を仕上げていく。基礎演習Ⅲは、その前の段階の授業である。

国語学概論Ⅰ・Ⅱ、国語法、国語史は、基本的には講義形式の授業である。履修学生は、21名～62名というように割合多くなっている。人数は多いのであるが、なるべく双方向の授業になるよう心がけている。1回の授業で全員に別々の練習問題を与え、口頭で解答するような取り組みも行っている。授業終了後には、リアクションペーパーを配布し、授業での気づきについて記入してもらっている。これにより、一人一人の理解度や関心の度合いを把握するようにしている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2023年度前期・後期とも授業評価アンケートを実施し、その結果を見て、よい点はさらによくし、改善すべき点は改善する方向で授業に反映させた。これについては、教員からのフィードバックとして報告をまとめ、事務にも提出した。

5、今後の教育目標

卒業論文については、構成がしっかりと示せるように指導する。研究の背景、目的、方法、結論、意義についても4月の時点から意識できるようにする。パソコンを用いて、コーパスを使ったりパワーポイントで資料を作成したりできるように努める。

その他の講義・演習の指導については、学生の主体性を重視しつつ、双方向の授業となるように心がけたい。学生が質問や発言をしやすい環境を作り、ディスカッションを行う。授業終了後にはリアクションペーパーで学生の気づきを確認し、次回の授業にフィードバックさせていく。

一方的に講義し、知識を授けるというような教育ではなく、「共に学ぶ」「共に育つ」という教育理念を重視した双方向性の高い教育にする。

1、教育の理念

私の教育理念は、学びを通して社会や人々のありようをより深く想像的に捉え、自らの主体的な態度を創造的に決定していく力を養うことにある。そのために以下のような点に留意しつつ、教育に携わっている。

①テキストの丁寧な読解

私の専門は、広くは仏教学、中でも浄土真宗の宗祖親鸞の思想に関する真宗学であり、仏教文献を対象とする。そのため仏教の概念・用語、また漢文・古文に習熟することが必要である。テキストに慣れる基礎的な学びを重視しつつ、仏教の概念・用語を適切に理解し、用いることができるようになることが、テキスト読解にまず必要である。この点を重視し、真宗学の基礎を学ぶ講義・演習を大切にしている。

②真宗を学として学ぶ

まなぶ（学・習）はまねぶ（真似）と同根の言葉であるとされるが、学としての真宗学は、親鸞の学び方に学ぶことであると先学（金子大榮『真宗学序説』、文栄堂、1966年）は指摘している。そこで真宗学とは、親鸞が仏教（経典・論疏）に学んだ学び方を明らかにし、仏の教えを歩む道を自ら選び取っていく主体的な学問であると理解している。

私は、大谷大学文学研究科真宗学専攻博士後期課程を満期退学後、真宗大谷派（東本願寺）教学研究所に勤め、主として親鸞教学の研究および真宗大谷派の教学・教化施策、僧侶養成に従事してきた。同朋大学文学部仏教学科専任教員となって以後は、それらの経験を踏まえ、これから仏教学・真宗学を学ぶ学生に対して、テキスト（聖典）を読解し、歴史を学ぶことが、仏教・真宗の人間観・社会観を学ぶことであるとともに、それは現在の人と社会のありようを考える視点であることを伝えている。

そこで特に重視しているのは、人権・差別の問題である。仏教思想、親鸞思想において平等は重要な教えであるが、この平等の教えを確かめ、人びとと共に平等を志向する主体を獲得するためには、我々自身に潜む差別性、現代社会における人権の問題への気づきが不可欠である。学生がそれぞれの経験を通して、また自らの経験を超えて社会や人々のありように目を向けることができるよう、講義・演習共にテキスト読解とともに実践的な学びも重視している

2、担当授業の概要

2023年度担当科目

教行信証講読演習Ⅰ 13名

教行信証講読演習Ⅱ 16名

真宗学演習 I	5 名
真宗学演習 II	5 名
真宗学演習 III	5 名
真宗学演習 IV	5 名
真宗学概論 I	15 名
真宗学概論 II	14 名
真宗史 II	21 名
真宗文化特論	2 名
宗教と人間（親鸞と現代） C	62 名
宗教と人間（親鸞と現代） D	34 名
教化学演習 A（別科）	11 名
真宗学講読 III（別科）	23 名

3、教育の方法

現在は学部生対象の仏教テキストに関する講読演習科目（「教行信証講読演習」、「真宗学講読」、「真宗学演習」）、および真宗学及び親鸞思想の概論科目（「真宗学概論」、「教化学演習」、真宗史 II（大学院対象「真宗文化特論」と同時開講）、「宗教と人間〈親鸞と現代〉」）を担当している。講読演習では、親鸞思想を学ぶ必須テキストである『教行信証』（「教行信証講読演習」）および『歎異抄』（「真宗学演習」）の読解を演習形式で行い、仏教概念・用語および漢文・古文に対する習熟、親鸞思想の基礎的な理解を目指している。概論では、真宗学概論は、真宗学を構成する主要なテキスト、歴史を概観し、真宗学を専攻するにあたって入門となる授業となることを目指している。同時開講の真宗史 II・真宗文化特論は、視聴覚教材（動画・絵画史料）を用いて、親鸞の伝記を真宗文化として捉え、真宗史料を多角的に考察できるようになる授業を目指している。社会福祉学部の学生対象の「宗教と人間（親鸞と現代）」は、宗教と接点の薄い現代の若者が、真宗に少しでも触れ、自らや社会のありようを振り返る視点となるよう、親鸞の生涯と思想を視聴覚教材（動画）も用いつつ、授業を行っている。1年で真宗大谷派教師資格取得を目指す別科対象の「真宗学講読」は『教行信証』を概括的に学ぶ講義形式の授業であり、「教化学演習」は伝記『宗祖親鸞聖人』（東本願寺）をテキストに、親鸞の生涯および親鸞が大切にされた法語（仏典の言葉）を通して、親鸞思想を伝える教化を視野に演習形式の授業を行い、資格取得後、僧侶として従事することを意識した授業を目指している。

講義形式の授業では、主に資料及び板書を用いしつつ、パワーポイントや DVD を用いた視聴覚教材（写真資料、漫画・アニメ）を用いている。親鸞が生きたのは平安末から鎌倉時代であり、親鸞思想の背景となる歴史、社会状況共に現代人には容易に把握しがたい側面

がある。ここに古典を理解する一つの障害があり、時代と社会を異とする歴史資料としての側面に注意を向けつつ、現代から過去、過去から現代を思考する往還的な視点の中で、テキスト及び思想を捉えるよう、工夫している。

また受講後復習ができるよう、記入式の学習資料を作成し、理解向上に努めている。

たとえば文献研究は、活字資料を主なテキストとなるが、親鸞には多くの自筆著作が遺されており、こうした原本（複製・写真）に触れることも親鸞思想を考えるに際して重要なことである。『教行信証』及び『歎異抄』を用いた文献研究科目も含め、親鸞という人に触れることができる資料を用いる他、歴史背景や社会状況を視覚的に捉えることができるよう、漫画・アニメを用いる。

また、教育は、教員の意見・考えを押しつけるものであってはならず、学生自身が学び、新たな発見をしていくことが重要である。学生の意見・考えは、学生自身が新たな知見にいたるための重要な手掛かりであると考え、学生の意見・考えを尊重し、対話的に授業ができるよう努めている。そのため授業時、あるいは授業以外でも質問・相談ができるよう、少人数教育である点を活かして関係を構築するよう努めている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートが行われた科目は以下の科目である。

教行信証講読演習、真宗学概論、真宗史Ⅱ、宗教と人間（親鸞と現代）、教化学演習、真宗学講読

演習科目は、できる限り学生の主体的な発表および話し合いを優先し、必要な場合助言することとしている。本年度は発表者によって内容の程度が大きく異なり、準備不足の学生が多く見られた。その場合、話し合いも十分行えないことが多く、他の受講者の満足度も低くなっていた。発表者の事前準備や資料作成に対してより丁寧な対応が必要であると考えている。また、学生間の対話がより活発になるよう、話し合いのポイントとなる点についてはより積極的に関与するよう工夫していきたいと考えている。またテキストに対する理解度を深めるため、より基礎的な学力を養成することが必要であると考えている。

講義科目は、おおむね受講生の評価はよいが、授業によっては難度の高さへの指摘もあるため、教材を工夫するなど、新たな取り組みが必要があると考えている。

23年度は受講生の習熟度の違いが授業理解や受講姿勢に影響する場合があります、どのレベルに合わせて授業を行うかではなく、それぞれが積極的に受講できるようにすることの難しさと大切さを感じた。次年度はこれを課題として取り組んでいくこととしたい。

5 今後の教育目標

前記教育理念に基づきつつ、同朋大学が重視する少人数教育を活かして、全人的な教育を心がけ、学生の生きる力を養う教育を目標としている。

文学部仏教学科は、真宗大谷派僧侶となるべく、真宗大谷派教師資格取得を目指す学生
の他、仏教に興味を持って入学する学生、あるいはまったく仏教に縁のないところから入
学してくる学生もいる。関心も目標も異なる学生が共に仏教を学び合う環境作りが課題で
ある。そのためにも学生の声を聞くことが必要であり、対話しながら学ぶ環境を目標とし
て取り組んでいきたいと考えている。

2023 年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 手嶋大侑

1、教育の理念

同朋大学文学部人文学科の教育理念は、建学の理念（同朋和敬）に基づいて個性の存在価値を大切に、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことである。

以上の教育理念のもと、手嶋は「日本史」分野の教育を担当し、学生の「教養力」「思考力」を養う授業を実施してきた。具体的には、講義系の授業を通して、基本的な知識の教授を、演習系の授業を通して、情報収集力・読解力・思考力を養う授業を実践してきた。

2、担当授業

- ・基礎演習ⅡD
- ・基礎演習ⅢA
- ・基礎演習Ⅳ
- ・人文学演習Ⅰ
- ・人文学演習Ⅱ
- ・人文学演習Ⅲ
- ・人文学演習Ⅳ
- ・卒業論文
- ・卒業論文指導
- ・歴史文化概論Ⅱ
- ・人文学講読演習Ⅰ13-2
- ・人文学講読演習Ⅱ13-2
- ・古文書基礎学2
- ・日本文化史（古代・中世）
- ・日本史A
- ・日本史B
- ・日本史特講1
- ・現代教養概論Ⅱ（オムニバス）
- ・名古屋・中村学（歴史文化）集中講義

3、教育の方法

「教養力」を養う授業としては、日本文化史（古代・中世）、日本史A・B、日本史特講1、古文書基礎学2が該当する。これらは自作の授業資料（レジュメ、パワポ）を用いた講義を主軸に進めており、そこでは、単なる知識の詰め込みに終始しないよう、授業内容を考えて

いる。例えば、ある歴史的出来事に関する複数人の研究者の解釈・理解を示すことによって、時代による解釈の変化、視点の転換の大切さ、多様な解釈が並立する（正解は一つとは限らない）ことなどを意識的に教えるようにしている。また、名古屋・中村学（歴史文化）では、熊本フィールドワークを実践するなど、座学ではない学びの方法も経験させている。

「思考力」を養う授業としては、人文学講読演習、人文学演習、卒業論文などが該当する。人文学講読演習では、日本古代史関係の史料を輪読する授業を実施している。そこでは、学生たちに担当条文について調べてもらい、レジュメを作成させ、レジュメに基づいて発表してもらっている。この作業を通して、必要な情報を収集・整理し、レジュメにまとめ、それを他人に伝えて議論する力を習得させるようにしている。また人文学演習、卒業論文では、学生の発表主軸の授業を実施している。そこでは、歴史学的な考え方（論理的思考）・史料読解・史料操作などを指導しつつ、先行研究の読解、論点の整理、テーマ（問題）設定、テーマに対する自身の見解を導き出すための調査・分析を学生に実践させており、この作業を通して、学生の歴史学的「思考力」を養っている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2023年度に実施された授業評価アンケートでは、総合的に平均以上であった。

ただし、講義系の授業において、学生が発言しやすい雰囲気が作れているかどうかの点が比較的低かったのは改善点だと考える。これについては、講義系授業で学生とコミュニケーションをとる時間が少なかったことが一つの要因と感ずるので、来年度はコミュニケーションの時間を積極的に作り、良い雰囲気づくりを心掛けていきたい。

5、今後の教育目標

学生に、“力が身に付いた”と実感してもらえるような授業を目標としたい。この点を達成するためには、文系学問に対する認識を根本的に変えていく必要がある。人文学科の学びを通して身に付く能力がいかに社会に出てから役に立つものなのかを、学生に繰り返し伝えていく努力を継続していきたい。

1 教育の理念

建学の精神を拠りどころとし、共に問う姿勢を基本におき、大学という場所でこそ可能な、人文科学の基本を学んでもらう。具体的には語学・政治文化・哲学的理解のうえに成りたつ思想史研究・文献学とはどのようなものかを伝えてゆく。またアジア諸地域に伝播し、各地の伝統文化や宗教と交流し、独自の展開を遂げた仏教文化を学ぶことで、次世代の若者に異文化共生の国際感覚を身につけてもらえるよう務める。以上は例年変わらない目標である。

2 担当授業の概要

2023 年度担当科目

2209 基礎演習Ⅱ	6 名
2410 サンسكريット語基礎学	12 名
2415 仏教文化講読演習 I4-4	15 名
3212 宗教と人間（釈尊と現代）A	48 名
3213 宗教と人間（釈尊と現代）B	39 名
3329 仏教文化演習ⅠA	6 名
3329 仏教文化演習ⅡA	6 名
3330 仏教文化演習ⅢA	5 名
3330 仏教文化演習ⅣA	5 名
4206 仏教史（インド）	52 名
4380 仏教学研究（大学院）	2 名
4681 仏教人間学研究Ⅰ（大学院）	11 名
5270 仏教学講義（別科）	23 名
5305 仏教学概論Ⅰ	9 名
5306 仏教学概論Ⅱ	9 名
教化学実習Ⅰ（大谷派教師課程）	4 名
教化学実習Ⅱ（大谷派教師課程）	4 名
教化学実習（別科）	23 名

3 教育の方法

経験的に、講義においても講読・演習においても適切なテキストを定めることが重要と考えている。学生はテキストの目次によって授業の全体像を把握できる。(本来ならばシラバスによって授業の全体像を把握してほしいところだが、実際問題としてシラバスにしっかり目を通す学生は少ない。テキストを持参させ、繰り返しその目次の中で毎回の授業がどこに位置するかを伝えるよう心がけている。) また予習・復習・課題提出に際しても有効である。現在、自作テキスト形式の授業(全文を自分で執筆しコピー・簡易製本して学生に無料配布し、これに基づいて授業を進める形式)は本年度については2科目に留まる(「宗教と人間」「仏教史(インド)」)。本来は「仏教学概論」についても自作テキストを用意したいのだが、時間的余裕がないため、やむなく既成の仏教入門書を代用しているが、これというものがなく、数年に一度は書を変えるのが現状である。(次年度は本年度同様、松尾剛次『仏教入門』を使用する予定。) 大谷派教師資格科目については東本願寺出版部の指定テキストを使用している。基礎演習は学生が各自に課題図書を選び、読書レポートを提出し、それを個別に添削・指導して、将来的に卒業論文を書くための最初の準備としている。本年度も例年通り、最後に文集を作成した。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートは例年と較べて大きな変動はないが、レポートの感想欄やリアクションペーパーを通じて、毎回の授業に感想を寄せてくれる学生が増えてきた。コロナ禍の非常手段であったオンライン講義やインターネットの経験を、新しい学生とのコミュニケーションに活用しているが、ある程度の制限も必要かと考えている。ネットは今後さらに活用していきたい。大学の研究はあまり安易なものであってはならないが、AIを利用した情報整理は今後必要な技術である。

近年はレポート等の訂正を命じたら再提出すること、指定した教科書は購入して持参すること、そもそも講義には筆記用具やノートを持ってくること、といった常識的なことに関しても、事前に十分な説明がなかったという感想が寄せられる場合もあり、現在の学生に対応した指導を考えたい。

5 今後の教育目標

学ぶことの楽しさと、大学の学問とは本来、資格を取るためや就職のための努力ではなく、真理を探究したいという衝動を解放する喜びであることを、若い世代に少しでも理解してもらえよう今後も務めたい。

1、教育の理念

本学文学部人文学科では、人間そのものの在り方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、現代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことを、学科全体の教育目標として掲げている。私は人文学科の中でも、日本文学専攻の教員として、主に近現代文学に関する授業を担当しており、文学をとおしてさまざまな時代や社会の中での人間そのものを見つめるとともに、テキストの読解に必要な知識や思考力、また、テキストを時代や社会といった文化的背景と関連づけて考えることのできる広い視野を養うことを目指している。文学は虚構ではあるが、そこに描き出されているのは、まさに人間の真理である。文学を探究することによって、現代を生きる力を育んでいきたいと考えている。

2、担当授業の概要（科目名および受講者数）

- ・日本文学概論Ⅱ 61名
- ・日本文学史（近現代）2 34名
- ・日本文学（近現代）2 43名
- ・人文学講読演習Ⅰ2-1 28名
- ・人文学講読演習Ⅱ2-1 25名
- ・人文学講読演習Ⅰ7-4 21名
- ・基礎演習ⅠD 17名
- ・基礎演習ⅣM 10名
- ・人文学演習ⅠB 10名
- ・人文学演習ⅡB 10名
- ・人文学演習ⅢB 6名
- ・人文学演習ⅣB 5名
- ・現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式、2回分を担当） 77名
- ・論文指導 4名
- ・卒業論文 4名
- ・国語科教育法Ⅰ（教職科目） 5名
- ・国語科教育法Ⅱ（教職科目） 5名
- ・国語科教育法Ⅲ（教職科目） 5名
- ・国語科教育法Ⅳ（教職科目） 5名

3、教育の方法

まず、「基礎演習」「人文学演習」「人文学講読演習」といった演習形式の授業においては、原則として、授業ごとに設定されたテーマについて、学生自身が分担して事前に調査や研究を行い、その発表をもとにしたディスカッション形式で授業を進めている。学生が主体的に課題に取り組むことで、文学テキストそのものを理解する力を養うとともに、情報収集や分析の方法を実践的に身につけることができると考えるからである。また、学生同士のディスカッションをとおして、各自が、自分の意見を言葉としての確に表現すること、あるいは逆に、他者の意見をしっかりと理解することの重要性に気づき、互いの視野を広げ、テーマに対する考えを深めていくことが可能となる。最終的には、そのテーマに対する自らの考えをレポートとしてまとめることで、卒業論文に向けた論文作成の方法も徐々に身につけていく。

次に、「日本文学概論」「日本文学史」「日本文学」「現代教養概論」といった講義形式の授業においては、第一に、わかりやすい授業を心がけている。その工夫の一つとして、授業では毎回、自作の資料プリントを配付し、それを用いながら授業を進めている。また、授業ごとに学生の理解度は異なるため、授業の最後には毎回、配付したコメント用紙に、学生自身が授業の中で感じた疑問点や興味を持った点などを記入してもらい、次の授業の具体的な展開に役立てている。そして、二つ目に心がけているのは、学生自身に考えさせる授業である。講義形式の授業では、どうしても学生が受け身になってしまうことが多いが、授業の中でこちらから学生に問いかけたり、逆に、学生から意見を言ってもらったりすることで、学生自身が考える時間を作り、できるだけ双方向的な授業展開になるよう配慮している。また、先ほどのコメント用紙に記入された学生からの疑問や意見の中で、ほかの学生の考えを深めるために役立つと思われるものについては、必ず次の授業の冒頭で紹介するようにしている。

最後に、「国語科教育法」であるが、この授業は人文学科の科目ではなく、中学校・高等学校の国語の教員免許取得を目指す学生が、3～4年次に履修する教職課程科目である。3年次には、学習指導要領の理解や学習指導案の作成など、国語科教育の基礎的な学習や実践を行い、4年次には、模擬授業を重ねることによって、授業や学習指導の上達を図っている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2023年度の「学生による授業評価アンケート」では、前期が「日本文学史（近現代）2」「人文学講読演習Ⅰ2-1」、「人文学講読演習Ⅰ7-4」、後期は「日本文学概論Ⅱ」「日本文学（近現代）2」「人文学講読演習Ⅱ2-1」の6つの授業について、学生からの評価が行われた。

その結果は、まず講義科目の「日本文学史（近現代）2」「日本文学（近現代）2」「日本文学概論Ⅱ」については、「近現代の文学特に戯作について詳しく教えてもらい凄いいい授

業だと思いました」「小説の歴史について当時の書かれた本とともに学ぶことができ良かったです」「先生が調べてまとめてくださる資料が毎回とても興味深い内容なので毎回授業の続きが気になる」(日本文学史(近現代)2)、「面白いエピソードを聞けるので楽しいと感じる」(日本文学(近現代)2)、「予備知識の話が多くあっておもしろいと思う」(日本文学概論Ⅱ)という好意的な評価が多かった。次年度も学生自身が興味関心を持って臨めるようにさらに工夫して授業を行いたい。

また、演習科目である「人文学講読演習Ⅰ2-1」「人文学講読演習Ⅰ7-4」「人文学講読演習Ⅱ2-1」については、「ディスカッションを重ねる事でより深くさまざまな意見を聞く事が出来、より深く考察する事が出来る」「『行人』を詳しく読み、他の人の意見が聞けて大変興味深いです」(人文学講読演習Ⅰ2-1)、「太宰治の『津軽』と『人間失格』について読み深めることができ、大変興味深い」(人文学講読演習Ⅰ2-1)、「小説の内容が鮮明化され、興味深い」「文学作品をじっくり読み、研究し、考察する楽しさを知ることができました。自分で読んだだけでは発見できないことを毎回授業で新たに発見でき、それが本当に楽しいです」(人文学講読演習Ⅱ2-4)というように、演習をとおして学生の学びの幅を広げることができたように思う。今後も学生の主体的な発表を中心に、学生自身に考えさせる学習を展開したい。

「学生による授業評価アンケート」の対象となった授業以外についても、常に授業内容を振り返りながら、より満足度の高い授業を実現できるよう、改善を行っていくつもりである。

5、今後の教育目標

最終的には、文学をとおして人間や社会の真理を探究するとともに、その探究をとおして、現代を生きる力を学生たちに育てていくことが教育目標である。その目標をできるだけ実現するためにも、まずは、学生が興味・関心を持つことのできる授業、そして、その興味・関心をもとに、学生自身が課題を見つけ、解決していく力を養えるような授業を心がけるつもりである。

1、教育の理念

同朋大学の建学の精神「同朋和敬」に基づく「共に学ぶ」「共にいきる」教育の実践を目指している。私は、主に日本文学（古典）の教育を担当しているが、昨今、「なぜ古典を学ぶのか」という問いが多く出されるようになってきたと感じている。このような問いを含めて、疑問に対して真摯に向き合って思考することこそが、人文学において必要なことと考えている。学科のポリシーに掲げられているように、人文学は、「混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育む」ものと言えるが、幅広い学びとともに、学生達が何かを探究する喜びを実感できるような教育を行いたい。

2、担当授業の概要

2023年度の担当授業科目の概要を示す。

- ・日本文学概論Ⅰ 古典文学概論
- ・日本文学史（中世） 鎌倉時代・室町時代の日本文学史
- ・日本文学（中世） お伽草子とその周辺
- ・仏教文学 仏教説話集を読む
- ・書誌学 書誌学入門
- ・人文情報学 人文情報学入門
- ・人文学講読演習Ⅰ 『百人一首』を通して古典文学研究の方法を学ぶ
- ・人文学講読演習Ⅱ 浦島伝承の諸相
- ・現代教養概論Ⅱ オムニバス 2回分「日本古典文学を考える1 現代社会において古典を学ぶことの意味」「日本古典文学を考える2 物語の伝承に時代の関心を読む」
- ・基礎演習Ⅰ、Ⅱ 初年次教育
- ・基礎演習Ⅳ、人文学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ ゼミ
- ・論文指導 卒業論文指導

3、教育の方法

上述の教育理念の達成のため、初年次教育や初回の授業においては特に、「大学での学びとは何か」「古典にはどのような意味があるか」など、学ぶことの意義を問いかけ、学生とともに考え、意識するようにしている。

講義科目における成績評価の方法として、毎回のコメントカード（考察・発見の記録）を期末試験と同程度に重視している。コメントカードの目的は、直接的には内容理解の確認と思考力や表現力の向上のためであるが、毎回のカードによって、学生を個別に理解して適切な助言をすることが可能となっている。アカデミックアドバイザーとしてかわる

基礎演習や人文学演習の学生だけでなく、できるだけ多くの学生を知ってそれぞれに合った対応ができるように努めている。必要な情報は教員間で共有するように心がけている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

授業アンケートでは、内容について「興味深い」「いろいろな視点が広がり思考が柔軟に」(2023年度「日本文学史(中世)」)等のコメントがある一方で、「難しい」「早すぎる」等の意見もある。古典文学に苦手意識を持つ学生も多くいるため、各授業時に提出された学生のコメントを確認し、理解の足りていない箇所を速やかに補うように心がけている。また、授業の構成についても常に見直しを行っているが、分かりやすい組み立てになるよう、より工夫していきたい。

2023年度は、特に「日本文学(中世)」での資料の提示(プロジェクターでの画像投影、本の回覧)について良い評価を得た。受講者が少なかったこともあり、通常よりも本(図録・図書・古典籍)を多く回覧できたことが良かったと思われる。「書誌学」の授業でも、複製の卷子本を扱ったり、袋綴じの江戸時代の和書の書誌を記録したりするなど、物に触れることを重視しているが、実際に手に取ることの意義は大きい。今や古典籍もインターネットで精細な電子画像を多く閲覧することができ、それらの活用も欠かせないが、実際に自分で触れて調査すると、いかに多くの情報を見落とししていたかに気付く。その体験に、原拠に当たることの重要性や面白さ、研究一般に対する基本姿勢を学んでほしいと考えている。

5、今後の教育目標

- ・人文学を通して人としての豊かさを育む
- ・古典文学に苦手意識がある人達に向けた授業方法の開発

1、教育の理念

本学文学部人文学科では、人間そのものの在り方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、現代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことを、学科全体の教育目標として掲げている。私は人文学科の中でも、日本文学専攻の教員として、主に古典文学、特に上代中古という古い時代に関する授業を担当している。古典文学を享受することと理解することの間には大きな違いがあるが、理解するために必要なのは自分たちとは異質な人間である古代に対する理解である。一文を理解するために必要な古典文法などの基礎的な要素は当然として、死生観はどうであったのか、男女関係はどのように発想されたのかなど、現代日本人とは決定的に異なる他者である人間が紡いだテキストを、その水準において解像度を上げていくことが求められる。そこで培われるのは、「時代が変わっても同じ日本人」だから理解できる古典文学ではなく、自身とは世界観も常識も何もかも違う他者に接近していく為の態度と作法である。古典文学を学ぶことを通して、共通言語としての「教養力」、他者理解の為の「思考力」を養成する教育を行いたい。

2、担当授業の概要（科目名および受講者数）

- ・日本文学史（上代・中古） 10名
- ・日本文学（上代・中古） 7名
- ・人文学講読演習Ⅰ3-2 5名
- ・人文学講読演習Ⅱ3-2 6名
- ・文章表現（論述表現） 18名
- ・基礎演習ⅡB 19名
- ・基礎演習ⅢD 24名
- ・基礎演習ⅣC 2名
- ・人文学演習ⅠC 4名
- ・人文学演習ⅡC 4名
- ・人文学演習ⅢC 1名
- ・人文学演習ⅣC 1名
- ・現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式、2回分を担当） 77名
- ・言語文化論 8名
- ・古文書基礎学 28名
- ・日本語文法 30名

3、教育の方法

まず、初年次科目として専門に分かれる前の「基礎演習」では、学生の学力状況に鑑み、文

章読解能力の向上を狙って評論文を数多く読ませている。文章を読解し、その内容を人に伝達することを授業内で繰り返し演習することで、これまでに読解してきた文章量の絶対的不足や、自身の「感じたこと、おもったこと」しか出力してこなかった学習不足を補うトレーニングを授業内で行わせている。「文章表現」も基本的には同様に位置づけながら、アカデミックな文章を書くのに必要とされる技術だけでなく、文章を書く際に必要な物事の認識、把握の仕方、文章の構成の仕方を教授している。今年度の新入学生の全体的な国語力の低下に鑑み、文章を読む作業も含めて教える必要を強く意識している。

「人文学演習」「人文学講読演習」といった演習形式の授業においては、原則として、授業ごとに設定されたテーマについて、学生自身が分担して事前に調査や研究を行い、その発表をもとにしたディスカッション形式で授業を進めている。昨年度より引き続いて指導している学生が着実に力をつけ、自身で古文を読解、注釈作業をこなせるようになってきているため、二年目を迎えてゼミらしくなってきた、本人達も成長を実感しているようである。基本的には古典文学作品を多く自身の力で読解して考える機会をなるべく多くもてるようにし、その中で卒業論文にもつながっていく問題意識を涵養していくことが目標である。

次に、「日本文学史」「日本文学」「言語文化論」といった講義形式の授業においては、学生の問題意識の喚起を心がけている。古典文学や、それに関わる論理的思考に触れたことのない学生が説明を受けて内容を知ってそれだけで満足してしまうことの無いよう、内容を理解した先にどういった問題があるのか、そこに気づくことで世界の見え方がどのように変わってしまうのかを伝えることを目的としている。その工夫の一つとして、「日本文学史」「日本文学」の授業では毎回、自作の資料プリントを配付し、それを用いながら授業を進めている。プリント内には読解課題を設定し、説明されて理解したつもりになって満足することのないよう、自身で考え続けながら教室にいることを求めている。また、授業の最後には毎回、配付したコメント用紙で、あるいは teams で学生自身が授業の中で学習したことをまとめて提出させている。感じたこと、思ったことではなく、毎回何を学習したか、それによって自身はどういった視点を獲得したか、振り返りを行うことで、漫然と授業に座ってプリント内容を覚えるのではなく、学習するというそのものを学んでいってもらうことを目指している。

「日本語文法」では高校文法を基礎から学び直すことを目標に全 15 回の授業を組み立てている。日本史専攻、日本文学専攻に進む学生が、資料を自身の力で読解できるようになる基礎力として、語学としての古典文法をしっかりとした形で身につける必要があるということを経験的に把握させ、その上で課題に取り組ませている。

最後に、「古文書基礎学」であるが、この授業はいろいろな専門で、或いは学芸委員資格に必要な能力である崩し字、特に平仮名を読めるようにするための授業であるので、視覚資料を用い、毎回文字を探し、読む実習を行っている。毎回のハードルを低く設定することで、学習の達成感を高め、一学期間を通して平仮名の習得を目指している。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2023年度では、前期が「文章表現（論述表現）」、「日本語文法」、後期は「古文書基礎学」の2つの授業が「学生による授業評価アンケート」の対象であった。

「文章表現（論述表現）」の授業は、昨年度の学生の実力に鑑み、課題のハードルを更に下げた内容としていたが、今年度の履修学生が全体として昨年度よりも国語の読解能力が下がっていることは否めず、作業のハードルが下がってなお課題に取り組むのに苦労している姿が多く見られた。昨年と同じく一学期の授業を通して一つの授業レポートを作り上げることを最終目標として、その提出を課題としたが、そもそもその課題の提出に至ることのできなかった学生もあり、また、それに至る為の一回一回の授業の段階的課題の意図がうまく理解できていない学生も見られた。最終課題まで提出できた学生からは「一つ一つの課題の意図がわかった」などの声が聞かれた。

「古文書基礎学」では、毎回の課題設定がうまくいったようで、「早く次の字が知りたい」「歌として把握できるようになると見え方が違う」などの声が聞かれた。

「日本語文法」では文法を基礎的な把握から授業内で解説したところ、このような授業が高校でも受けられたら古文が嫌いにならなかった、などの前向きな声が聞かれた。

そのほかの授業でも、常に授業内容を振り返りながら、より満足度の高い授業を実現できるよう、改善を行っていくつもりである。

5、今後の教育目標

最終的には、学生たちが学に触れることによって自身の世界との向き合い方を構築していきけるように知識を教授し、問題意識を涵養していくことが教育目標である。その目標をできるだけ実現するためにも、まずは、学生がより多くの知識を獲得していくことのできる授業、そして、その知識をもとに、学生自身がさらなる学習を重ね、自分自身の問題意識をもって世界と対峙できる力を養えるような授業を心がけるつもりである。

今年度、授業内外で学生と向き合う中で、そもそも授業に出る出ない、学校に来る来ないのレベルでの問題をどのように解決していくかという課題に多く取り組まねばならなかった。最終的には個々の学生の現状を丁寧に把握する以外に取ることのできる手段はないが、そこまで含めて教育という意識を恒常的に持ちながら学生と対峙したい。

2021 年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 山脇雅夫

1、教育の理念

同朋大学の建学の理念である「同朋和敬」には、阿弥陀仏の絶対平等の救いという教えが根底にある。この救いに救われていくものとして自己を見、他者を見ることは、社会的な身分や民族の差を超越した絶対の相において人間をすることである。そうした境位は、哲学がその根本において希求してきたものと重なっている。人が「よく生きる」ためには、そうしたものを求めていくほかないということが、哲学の父たちの根本的立場であった。わたしが教育において目差すのは、主として西洋の哲学の歴史を築いてきた哲学者たちの仕事に学びながら、そうした哲学の立場を学生諸君に伝えることである。そのことをつうじて、学生諸君がさまざまな日常的偏見から自分を解放し、とらわれのない自由で強靱な思考力＝哲学的思考力を培うことを支援したい。

2、担当授業の概要

欧州文学概論 51 名（前期；聖書の世界。後期：ギリシア文化）

・哲学 71 名（哲学の根本にあるものを西洋哲学の歴史に探る）

・哲学史 168 名（西洋近代哲学史、特に 17 世紀を中心に）

・倫理学 69 名（功利主義、義務論、コミュニタリアニズム等、現代倫理学説を身近な問題から）

・ドイツ語 I, II 21 名（ドイツ文法初歩）

・人文学演習 I, II, III, IV 16 名（石田英敬『自分と未来の作り方』を検討し、現代文化の根本特徴を学習。卒論指導）

・人文学講読演習 37 名（『倫理学の道具箱』により、倫理的思考法のさまざまな切り口を学習）

・欧州思想 100 名（マルクスの『資本論』の基本概念を解説しつつ、マルクスの社会批判とミヒャエル・エンデの『モモ』における現代文明批判が通底するものであることを紹介した）

・欧州文学概論 I 51 名, II 39 名（欧州文学のバックボーンとしての聖書文学とギリシア文化）

・現代世界事情 52 名（SDGs から見る現代世界の諸問題。温暖化ガス地球温暖化原因説の批判的検討）

・基礎演習 II 23 名（初年次教育。大学での学び方）

・基礎演習 IV 8 名（現代思想の基礎）

3、教育の方法

・各種講義においては、哲学・倫理学等の古典的な問題を現代的課題と結びつけことによつて、古典的問題が今なお人間の課題であり、哲学・倫理学の考え方を現代を読み解く有効

なツールとなっていることを学生諸君に確認してもらえるよう努めている。あわせて、西洋文化のさまざまな側面に教養を深めてもらうため、ギリシア文化や聖書といった西洋文化の土台、資本主義の精神などを授業テーマとして取り上げている。

・ゼミ等においては、哲学的テキストの精読・それについての討論を中心に、読解力、自分の考えを言語化し人に伝える能力、哲学的思考力等の涵養につとめている。また、レポート等の作成を通じた文章力の育成を目指している。

・どの授業においても、わたしは、教科書や教師から教えられた知識をため込むのではなく、自分の問題関心、自分なりの「？」から出発する思考の経験を重視している。哲学的問題は当たり前だと思っていたことを揺さぶるものであり、そうした力を、学生諸君が自分なりの問題を発見するために活用している。

・オムニバス講義の一部として、映画『Ghost in the Shell』を観て、現代のポスト・ヒューマン状況について考察したところ、学生のみなさんの関心を惹起できた。

4、学生からの評価と授業改善への努力

・授業評価アンケートの数値はおおむね平均値以上を確保している。いくつものわたしの授業を受講している学生さんから「いろいろな授業がつながっていることがわかった」ということばをいただいたことは、わたし自身が意図したものでないにせよ、哲学、倫理学、講読演習といった授業がシナジー効果をあげているということであろう。この点は、今後は意識的に追及していきたい。一昨年改善点として指摘された「動画の活用を増やした方がいい」については、今期もギリシア悲劇ソフト（ソフォクレスの『エレクトラ』）を鑑賞するなどし、改善に努めた。大教室授業が多かったことに対応し、板書などの工夫をした。

5、今後の教育目標

・上滑りに流れていく情報に曝されている現代の若者に、強力な思考や想いに裏打ちされた「ことば」に触れる機会を提供することは、文学部教育の課題である。「すぐ役に立つものは、すぐに役に立たなくなる」（小泉信三）ということ肝に銘じ、学生諸君が本物のことばをみずからの血肉化し、人生を支える力とすることができるよう、サポートをしていきたい。

1、教育の理念

本学文学部人文学科のアドミッションポリシーに、「文学・歴史・思想・文化の各分野におけるアカデミックな教育を基盤に、人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むこと」を教育目的とするとあるが、私はその方針に基づいて、中国古典文学（史伝、中国哲学を含む）をベースに、中国語、伝統文化、映像文化に至るまで、「日本文学」「歴史文化」「現代教養」の三専攻にまたがって幅広く科目を担当しつつ、学生たちの基礎力や感性を磨くことを目指して教育に取り組んでいる。

2、担当授業の概要

2023 年度は以下の科目を担当した。

- ① 全学向け（基礎力養成に関わる）科目としては、
漢文基礎学Ⅰ、Ⅱに加え、中国語Ⅰ、Ⅱを担当した。
- ② 文学部向け教養科目としては
現代教養概論Ⅰ（2 コマ分担当）と文化総合(7 コマ分担当)を担当した
また、2年ぶりに中国芸能（表象文化論）を担当し、台湾布袋戲の講義を行った。
- ③ 文学部向け専門科目（及び教職科目）としては
中国文学概論Ⅰ、Ⅱ、人文学講読演習Ⅰ、Ⅱ
- ④ 人文学科（ゼミ）専門科目
日本文学専攻と現代教養専攻の二専攻にまたがり
基礎演習Ⅳ、人文学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを二系統担当した
4年生に対しては人文学演習Ⅳとともに卒業論文・論文指導を行った。 以上

3、教育の方法

授業の方法としては、講義系の科目と演習（講読）系の科目とで大きくやり方は異なる。

講義系の科目では、予め用意したプリント資料を学生に配付し、その資料に基づいて逐次説明を加えながら講義するスタイルを基本とするが、学生たちの理解を深めるために多くの映像資料を副次的に用いるようにしている。授業時には折に触れて学生に質問をし、定期的にコメントペーパーを出させるなどして、学生の理解度を確認しながら進めることを心がけている。

演習系の科目のうち中国文学関係の授業においては、主として中国古典（漢文）のテキスト（白文の状態）を配布し、訓点をつけて読解することを学生たちに課している。毎回担当者を定め、工具書（辞書など）や訳本、解説書等を参考にしてまとめた自分の読み方をレジ

ユメとして予め提出させた上で、授業時にはそのレジュメを元にその読み方の可否を受講者全員で検討していくという方法を採用している。標準的な読み方を一方的に教えるというのではなく、学生たちに自分で考えさせ、なぜそういう読み方になるのかを議論させることで、より深い読解力が養成されると考えている。

現代教養専攻の演習では「表象文化」「地域文化」をテーマとしており、授業においては表演芸術（映画、演劇、古典芸能など）のビデオを実際に鑑賞した上で、その面白さ、芸術的価値などを受講者全員で討論する方法を採用している。

演習系の科目においては、文章を読むか動画を観るかの違いはあれども、学生個々が独りよがりにならず、議論を通じて自分自身を客観視できるようになることを目指すという点に違いは無い。

これらの教育方法は長年大学教育に関わる中で自然と醸成されたものだが、結果的にアクティブ・ラーニングなどの考え方も沿うものとなっており、学生たちの自発的な学習意欲をかき立てるのにも大いに役に立っていると考えている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

私が担当する科目は十年以上継続して実施しているものが少なくないが、その間の学生の授業評価アンケートの結果を見る限り、同一授業での経年変化、年ごとのばらつきはほとんど見られない。全体的な授業評価においては過去から現在に至るまで問題となるような結果が出たことはほぼないと言ってよい。

人文学科の場合、1年次の基礎科目の受講状況などから、2年次以上の学生の個々の学力レベルや傾向を、われわれ教員はほぼつかんでいる。演習（講読）系の科目は2年次以上が受講の対象となるが、私の場合、受講生の構成を見て授業の運営方針を立てるようにしており、2、3、4年生の人数バランスや、学力レベルの高い学生の割合等を勘案した上で、解説の質や量を変更し、学生の反応をよく観察しながら進めるようにしているため、年度当初はなかなかついて来られなかった学生も、半期終わる頃にはかなり変化を見せるようになるのが通例である。

5、今後の教育目標

昨年、一昨年も指摘したことだが、文科省が唱える ICT 環境整備等と本学学生の現状との間には明らかに温度差がある。スマートフォンの高機能化によって、情報収集からデータ保存、レポートの作成に至るまで、パソコンよりも便利に行えるようになってきたことを考えれば、パソコンで卒論を書くようにと強制することには意味が無く、スマートフォンを教育にいかに関活用するかを考えた方がよい。

今年度はコロナから解放されれば対面での授業に戻ったが、双方向コミュニケーションツール「Teams」を使うことが学生たちにもなじんできたことを建設的に考える必要はあろう。

我々人文学をベースとする教員が大学教育の中で担うべき役割は、従来通り学生たちに、文献を読む能力（読解力）、資料を分析する能力（分析力）、それに基づいて議論する能力（ディベート力）、結果を発表する能力（プレゼンテーション力）を身につけさせるようトレーニングすること以外にはない。技術は時とともに移り変わるものであるので、それに乗り遅れないよう最低限努力する必要があるが、技術に支配されない普遍的な教育目標を持ち続けることこそ大切であることは言うまでもない。